琉球大学学術リポジトリ

高機能自閉症児における社会性障害の改善に関する研究

メタデータ	言語: 出版者: 神園幸郎 公開日: 2009-03-06 キーワード (Ja): 高機能自閉症児, 社会性障害, 自己制御, ファンタジー, 自閉的ファンタジー, 共同注意, 愛着関係, 指さし キーワード (En): high-functioning autism, social disorder, self-control, fantasy, autistic fantasy, joint attention, attachment, pointing 作成者: 神園, 幸郎, Kamizono, Sachiro メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/9087

ある高機能自閉症児の「指さし行動」の特徴

松島はるか　　神園幸郎

Characteristics of pointing gestures in a high-functioning child with autism

Haruka MATSUSHIMA　　Sachiro KAMIZONO

ある高機能自閉症児の「指さし行動」の特徴

松島はるか　神園幸郎

Characteristics of pointing gestures in a high-functioning child with autism

Haruka MATSUSHIMA*　　Sachiro KAMIZONO**

We examined pointing gestures in a high-functioning boy with autism. We analyzed his pointing gestures in his mother's record, nursery nurse's record and VTR records between 0 : 06 and 5 : 10 of age. The observed period was divided 3 levels on the basis of the functioning of self-regulation. These were non-regulation, regulation-by-others and self-regulation. Based on these levels, his pointing gestures were analyzed. Results were as follows : his pointing gestures showed the change depending on which level of self-regulation was. In non-regulation level (0 : 06 - 3 : 04 yrs), his pointing gestures were tracing movements, that is, synchronized with mother's one. Next level (3 : 05 - 3 : 09 yrs), that was tracing reciprocity of mutual exchanges. Final level (3 : 10 - 5 : 10 yrs), that was intrusion into physical world from representational world. It should be pointed that these characteristics of his pointing gestures suggest universal ones in high-functioning children with autism.

Key words : high-functioning autism, pointing gestures, self-regulation

I　はじめに

従来から，自閉症児には模倣の欠如，歩行や姿勢パターンの特異性などの動作や運動に纏わる障害がみられることが指摘されてきた（e.g., DeMyer, 1972 ; Damasio, & Maurer, 1978）。最近では，アスペルガー症候群と運動障害との関連性を指摘する研究（Cox, 1991 ; Wing, 1981）や，アスペルガー症候群と高機能自閉症を鑑別診断する際に運動障害が利用できるかどうかを吟味する研究（e.g., Burgoine, & Wing, 1983 ; Manjiviona, & Prior, 1995）などがみられるようになってきた。しかしながら，自閉症児が示す運動や動作の特異性と，中核をなす自閉症状との関連に直接的に言及した研究は少ない。

神園（1998）は，自閉症児で問題となる運動障害は単に大脳生理学の問題だけに還元できない性質を持っており，心的および認知社会的な背景を考慮することが重要であるとして，彼らの日常生活における姿勢・運動の「ぎこちなさ」を分類し，その特徴を記述した。この研究を受けて，松島・神園（2004）は姿勢・運動自体の「ぎこちなさ」に加えて，それが生起する行動文脈をも分析の射程に入れて吟味する意味で,「ぎこちなさ」を「不

* Yuinosato, 1031-1, Okinawa-shi, Okinawa, Japan.
** Faculty of Education, Uni. of the Ryukyus, Okinawa, Japan.

自然な動作」と改めたうえ，神園（1998）で検討課題とされていたその発達的な変化を検討した。この研究では，発達に伴う「不自然な動作」の質的な変化は行動の発動を司る制御機能の変化に起因するという，自閉症児における「不自然な動作」の発生機序に関わる新たな枠組みが提案されている。

松島・神園（2004）はさまざまな「不自然な動作」を指摘しているが，なかでも対象児が示す指さし行動の不自然さはその頻度の高さと特異な性質から注目に値する。従来，自閉症児の指さし行動の障害は，象徴機能を基盤とする対象指示機能の障害として理解されてきた。ところが，自閉症児においても他者にモノや行為を要求する指さし行動は出現するものの，他者との注意の共有を必要とする叙述の指さし行動はほとんど見られないとの報告（Baron-Cohen, 1988; Frith, 1989）がなされるようになって，彼らの指さし行動の障害を対象指示機能の障害だけに求めることはできなくなった。他者との共同注意が必要とされる非言語的なコミュニケーション行動において，自閉症児はとりわけ重篤な障害を示すという多くの研究（e.g., Baron-Cohen, 1989; Curcio, 1978; Mundy, sigman, & Kasari, 1994; Sigman, Mundy, Ungerer, & Sherman, 1986; Wetherby, & Prutting, 1984）に基づいて，自閉症児の指さし行動の障害も共同注意の枠組みのなかで再解釈がなされるようになった。すなわち，要求の指さし行動に比べて叙述の指さし行動に困難を示す自閉症児の特性は，他者と注意を共有することが難しいという共同注意の障害に起因すると考えられるようになったのである（e.g., Baron-Cohen, 1989）。

筆者らも自閉症児の臨床場面において要求の指さし行動に比べて叙述の指さし行動が観察され難いことを確認している。しかし，松島・神園（2004）で対象とした高機能自閉症児においては，指さし行動自体の頻度は必ずしも少ないわけではなく，先述したようにむしろその頻度は高かった。興味深いことに，そこで観察された指さし行動は，先に指摘した要求や叙述の指さし行動の範疇に該当しないものが大勢を占めていた。たとえば，絵本に描かれた絵を見る際に自ら絵を指さすといった，Goodhart & Baron-Cohen（1993）が指摘したような自らの注意を当該の対象に向けるための自己志向的な指さし行動と思われるものが認められた。しかし，それ以外の多様な機能を持つと思われるような指さし行動も多数認められており，詳細な検討が必要である。

そこで，本研究は従来の指さし行動の範疇に属さない自閉症児の多様な指さし行動の発生機序を，その動作的側面に着目して発達的に描き出すことを目的とする。

ところで，松島・神園（2004）は，言語の行動調整に関するLuria（1969）の研究に始まり，情動や感情の制御に関わる研究（Mischel, & Mischel, 1983; 氏家，1980; 柏木，1988），そして最近の自己制御を対人コミュニケーションの中で関係力動的に捉えようとする研究（鯨岡，1993）などの自己制御に関する研究の知見を基盤として，自閉症児に出現する「不自然な動作」の発達的特徴を記述する枠組みを提案した。それは次の3つの時期区分であった。すなわち，社会的相互作用が皆無で，多動傾向が前景に現われ，行動に目的性が見られず，しかも日常生活動作は他者（母親）の全介助を要する時期，換言すれば動作の発動に制御が機能していない「無制御期」，母親や保育士などの他者の指示や命令などによって行動が制御される「他者制御期」，そして自己の意志や意図に基づいて行動が制御される「自己制御期」であった。この時期区分によって，松島・神園（2004）は自閉症児にみられる「不自然な動作」の認知・社会的背景の質的変化を明瞭に記述できることを主張した。そこで，本研究は自閉症児の指さし行動の特徴を記述するための枠組みとして，松島・神園（2004）によってその有効性が指摘された時期区分を採用することにした。

Ⅱ 方 法

1．対象児

本児は199×年生まれの男児（A）である。父35歳，母31歳のとき，第1子として，帝王切開により出生する。妊娠2ヵ月と4ヵ月時に切迫流産の徴候があったが，持ち直した。定頚3ヵ月，始歩12ヵ月で運動発達上の問題はなかった。1

歳の誕生日の頃には「ワンワン」などいくつかのことばが出ていた。1歳3ヵ月時には目が合わなくなり，つま先で歩くなどの特異な行動が出現しはじめた。1歳6ヵ月健診で発達上の遅れが指摘され，1歳8ヵ月時に児童相談所にて自閉性障害と診断された。この頃は母親以外の他者を寄せ付けず，他者が近づくと声を出して威嚇したり，部屋のドアを閉めたりした。2歳2ヵ月で簡単な文章が読めるようになった。アルファベットもすぐ覚えた。2歳6ヵ月頃になると消失していた単語（りんご，みかんなど）が出はじめた。3歳を過ぎると語彙数が増加し，母親に対しては一語発話によって要求を伝達できるようになった。3歳3ヵ月時に保育所に入所し，障害児保育の該当児として処遇された。数字や文字へのこだわりは依然として強く，カレンダーや文字ブロックなどでのひとり遊びが多く，他児との関わりはほとんどなかった。

以上の生育歴と，小学校入学時の田中・ビネー式知能検査のIQ136を考慮すると，本児はいわゆる高機能自閉症児に該当するものと思われる。

2．手続き

本研究は，以下に示す本児の生後6ヵ月から4歳11ヶ月までの3種類の資料を分析対象とした。①0：06から4：07（0：06は6ヵ月，4：07は4歳4ヵ月の略：以下同様）までの，母親による手記（以下，母手記と略す），②3：03から5：10までの担当保育士による保育記録（以下，保育記録と略す），そして，③3：05から4：11までのN保育所場面におけるVTR資料（以下，VTR資料と略す）。①と②については，記録の中から本児の指さし行動についての記述を抜き出し，それぞれエピソード番号を付して記録した。③のVTR資料は，R大学学生によって1ヵ月に1回の割合で収録された。そして，そのVTR資料から，本児の指さし行動をその前後の動作系列も含めて抽出し，DVDディスクに記録した。そして，抽出されたそれぞれの場面はエピソード番号を付されて文字記録された。なお，抽出されたエピソードの総数は55場面であった。

3．分析指標及び分析方法

分析は以下の三つの指標に基づいて筆者らの2名によって行われた。第一の指標は，指さし行動の運動特性である。本児の指さし行動は，実に多様な運動特性を示していたことから，それぞれ異なる意味や役割を担っている可能性が想定された。それゆえ，指さし行動の運動特性が指標として採用された。第二の指標は，指さし行動に随伴する発話内容である。発話の内容は，指さし行動の意味を推測する上で重要な指標となり得ることから分析の指標とされた。第三の指標は，指さし行動が指示する対象である。指さし行動は対象を指示する機能を持つために，対象物が存在するのは当然である。しかし，本児の行動をつぶさに観察すると，明らかに指示対象を持たない指さし行動の出現が確認された。そして，それらの指さし行動は，自閉症児に特有な性質を表す可能性が想定されるため，指さし行動の対象を分析の指標とした。

上記の分析指標に基づいて，2名の評定者は指さし行動の発達的な意味を検討した。分析にあたっては，時間的視点から，当該の指さし行動がそれ以前の指さし行動と質的にどのように異なるかに焦点を絞って，それぞれの指さし行動の発達的意味を特定した。なお，2名の評定者の見解が異なる場合は，統一した見解が得られるように慎重に協議を重ねた。しかし，一致した見解が得られないときは，当該のエピソードを分析対象から除外した。

Ⅲ　結果と考察

1．行動の制御機能に基づく各時期の特徴

松島・神園（2004）は自己制御に関する研究の知見を基盤として，自閉症児に出現する「不自然な動作」の発達的特徴を記述する枠組みを提案した。そして，自閉症児が示す「不自然な動作」の発達変化が，行動の発動を司る制御機能の質的変化に起因するとの見解を示した。詳細は松島・神園（2004）に譲るとして，ここでは本児の発達に伴う制御機能の質的変化の概略を記述する。

松島・神園（2004）によれば，行動の発動に制

御が機能しない「無制御期」（0：06～3：03），行動が他者の制御に依存する「他者制御期」（3：04～3：09），そして自己の制御で行動が発動される「自己制御期」（3：10～5：10）の3つの質的に異なる時期が指摘されている。各時期における本児の行動特徴を松島・神園（2004）から抜粋して以下に記述する。

「無制御期」における本児は，母親以外の他者には全く関心を示さず，母親とのいわば密着的接近状態にあって社会的相互作用はきわめて乏しかった。さらに，この時期は多動傾向が顕著であり，目的的な行動は皆無に等しかった。しかも，この頃の本児は失禁の自覚さえも欠落しているなど，日常生活動作は全般にわたって母親の介助を必要としていた。

保育所入所後1ヵ月頃に，その始まりが指摘されている「他者制御期」に入ると，反響言語が出現しはじめ，他者への志向性の兆しが見られるようになった。この頃になると，これまでは他者に全面的に依存してきた日常生活動作も保育士の指示に従いながら次第に習得されるようになった。そのうち，特定の生活動作が必要とされる場面で，随伴する保育士の指示がなくても自ら当該の保育士の指示（たとえば，「ズボン履いて」「カバンあけて」などの指さしを伴った保育士の指示言語）を呟きながら適切な動作を発動することができるようになった。したがって，この時期には本児の保育所生活における適応性は飛躍的に改善した。ただし，実際には保育士の指示がないにも拘わらず，これらの動作は，保育士の指示をそのままなぞっているという点で，本児自らの意図に基づいて発動されているとは言い難い。むしろ，それらはあくまでも他者の意図によって制御されているとみるべきである。この点が保育士の指示をそのままなぞる動作が「他者制御」とみなされる所以である。

本児は保育所に入所して半年が過ぎる頃になると，日常生活動作は一通り自立するとともに，それ以外の動作においても自らの意思で行動を発動することが可能になった。この時期になって，本児は制御の主体を他者から自己に引き戻し，行動の表出と抑制に関わる自己制御が可能になったものと思われる。この「自己制御期」においては，本児の内的活動に起源を持つ不自然な動作や奇妙な動作が随所で出現するようになったことが特徴として指摘されている。

2．各時期に出現した指さし行動の特徴

本児の認知・社会的発達に伴う制御機能の質的差異を指摘した松島・神園（2004）の枠組みに基づいて，本児に見られた指さし行動を検討した。以下に，動作の発動に制御が機能しない「無制御期」（0：06～3：03），動作が他者の制御に依存する「他者制御期」（3：04～3：09），そして自己の制御で動作を発動する「自己制御期」（3：10～5：10）における本児の指さし行動の特徴をそれぞれの時期ごとに記述した。

1）無制御期（0：06～3：03）の特徴

無制御期は動作の発動に制御が機能しない時期であったため，意図的動作としての指さし行動の出現は皆無であった。ただ，この時期が終了する間際の3歳3ヵ月時に指さし行動の初出に関するきわめて興味深い記述が母親の手記に見出された。その手記によれば，それまで母親の指さしによって指示する対象物を探し出すことができなかった本児が，次に示すような奇妙な行動を示したとのことである。以下にその抜粋を記述した。

単語（言葉）の意味はわかっていても，指さしになると，母親の指がさしているものが理解できない。物を探せない。指をさすと，探し出せない，そして変わった行動をするようになった。母親の指を見て，自分も母親の指に向かって指をさす。次に，母親と自分との距離があると，指をさしたまま歩き出し，近づくと，指でもって角度をとって（角度を変えて）さしている物の方向に歩き出す。歩きながら，指をさしたまま，後ろを振り返り，母親の指でさしている方向を，再度，確認する。こうして，物を探そうとしますが，母親の指がさしている物を探す事はできませんでした。自分の目で母親の目を見て，位置確認をしない。自分の指でもって位置確認をしているかのように思われて仕方がありませんでした（エピソード1，3：03，母手記）。

母親の指さしを見た本児が母親と同じ動作を示したことは，母親の指示する対象物を本児なりに

探し出そうとする行動として理解できる。すなわち，本児はこの時点で母親の指さしが何らかの伝達的な意味と志向性を帯びていることを感知できており，しかも母親と同型的な身体の姿勢をとることが母親の指示する対象物を探し出す上で何らかの効力を持ちうるものと考えたのではないだろうか。しかし，身体姿勢の同型性を確保するだけでは対象物を探し出すことができないために，次の行動，すなわち母親に接近して母親の指さしの向きと自己のそれとを重ねることを試みたのであろう。つまり，身体的同型性の確保に加えて身体軸を重ねることで，母親と同一の視点を取ろうとしたのではないだろうか。一般に，自閉症児は他者のパースペクティブ（視点）に立つことが極めて難しいことが指摘されている（浜田，1992)。指さし理解のような視知覚認知を基盤とする行動においても他者視点の把握は必須であるため，自閉症児にとって指さしの理解は容易なことではない。本児は母親の指さしを母親の動作と身体軸を自らなぞることで理解しようと試みたものと推察できる。

以上のことから，本児の初出の指さし行動は母親の指示する対象物を探索する手段として出現したものと言えよう。つまり，この時期の本児の指さし行動は，母親の指さし行動を同型的になぞり，しかも身体軸までもなぞることで同一の視点を確保して指示対象を探索しようとする，いわば「なぞり」としての指さし行動にその特徴を指摘できる。

2）他者制御期（3：04～3：09）の特徴

他者制御期は，保育士の指示とそれに対応する動作を随伴的になぞることで日常生活動作を遂行し，獲得する時期であった。

無制御期終盤に出現した同型的ななぞりの指さし行動（エピソード1）は，他者制御期に入ると消失した。代わってこの時期には，他者の指示とそれに対応する自己の動作との随伴関係をなぞる指さし行動が出現した。それは，動作を「なぞる」という点では，先に指摘した無制御期のエピソード1と同様であった。しかし，エピソード1が他者の動作の同型的な「なぞり」であるのに対して，この時期の指さし行動は他者の指示とそれに対応する自己の動作との相補的な随伴関係の「なぞり」であるという点で両者は明らかに異なっている。この時期の特徴的な指さし行動を示す二つのエピソードを以下に示した。

Aは教室から屋外に遊びに行くところである。Aは，「上靴履いて」と言いつつ，手の平が上向きの指さし（Fig. 1-1）で靴箱をさし，教室の中にいる保育士を見る。再び靴箱を見て，通常の指さし（Fig. 1-2）をしてから靴箱に近づくが，すぐ靴箱から離れる（エピソード2，3：05，VTR記録)。

無制御期において日常の生活動作を全面的に母親に依存していた本児は，保育所に入所すると保育所生活に必要とされる生活動作について保育士から逐一指導を受けた。こうした指導が効を奏して，保育士の指導のもとではある程度の生活動作が成立するようになった。しかし，所与の生活動作を要求される事態で，常に保育士が傍にいるとは限らない。しばらくすると，そうした時でも上記のエピソード2に示されるように，本児は特定の保育士の指示を自ら取り込み，それをなぞることで行動を発動できるようになった。「上靴履いて」という言葉に随伴する指さしは手の平が上向き（Fig. 1-1）になっており，担当保育士が本児に行動を指示する際の指さしと形態上同一であった。つまり，本児は他者視点から発せられた指示とその際に随伴する指さしをそっくりそのままなぞったのである。次いで，本児は保育士の指示する動作を実行に移すべく自己の視点からの指さし（手の甲が上向き，*Fig. 1-2*）とともに行動を発動したのである。本児は日常生活動作に纏わる保育士の指示とそれに対応する自らの動作との相補的な随伴関係を取り込み，それをなぞることで保育所生活における適応を図っていた。こうした日常生活動作の発動の契機が内的な表象であるとはいえ他者の指示であるので，上記のエピソード2はまさにこの時期の制御の特徴を如実に反映しているといえよう。

教室内における自由遊び場面である。Aは教室からトイレを覗いている。そこへ女児が，「なんでこっちいってんの？」と言いながら近寄る。Aは女児と目を合わせた後，トイレに向けて手の平を上にして指さし（Fig. 2-1)，次に通常の指さし

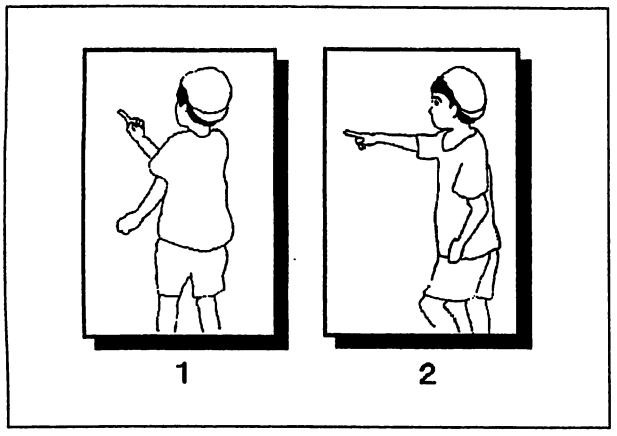

Fig. 1　相補的随伴関係の「なぞり」

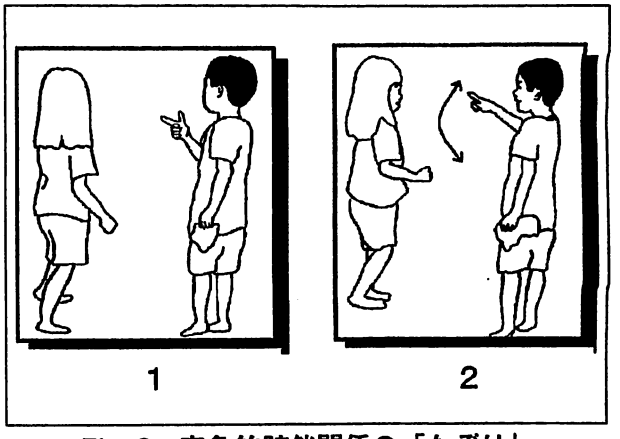

Fig. 2　表象的随伴関係の「なぞり」

(Fig. 2-2) を上下に3回振りながら，「1,2,3じゃなァい？」と女児の顔を見て言う（エピソード3，3：05, VTR記録)。

ある女児との交流場面において，本児はその女児から，「なんでこっちいってんの？」と質問を受ける。ところが，それに対する本児の応答のことばは女児の意図した会話の文脈に一致していなかった。興味深いことに，女児の質問を受けた本児の行動は先のエピソード2と同様に，他者の指示や質問に対応する手の平が上向きの指さし行動 (*Fig. 2-1*) とそれに続く応答としての発話と手の甲が上向きの指さし行動 (*Fig. 2-2*) が随伴して出現した。自由遊び場面で観察されたエピソード3は，エピソード2と異なり日常生活動作を要求される場面ではない。そのため，必ずしも過去に取り込んだ他者の指示とそれに対する応答という相補的な随伴関係をなぞる必要性に迫られているわけではない。それでは，なぜこうした行動が出現したのだろうか。考えられることは，次のようなことである。おそらく，当該の女児の「なんでこっちいってんの？」という問いが，本児の中に取り込まれて既にパターン化されている質問と応答の相補的な随伴関係を賦活させたのではないだろうか。このように考えれば，エピソード3も質問する他者の指さしと応答する自己の指さしの相補的な随伴関係をなぞっているという点で，先のエピソード2と同じ構造を示していると言えよう。

以上に見るように，他者制御期に出現した本児の指さし行動は，他者と自己の相補的な随伴関係をなぞって表出されたものであった。本児における指さし行動の出現の契機が，保育所生活で求められる日常生活動作を獲得することであった点は特筆しておくべきであろう。

無制御期における初出の指さし行動から他者制御期までの本児の指さし行動の特徴は次の三つに集約される。

一つは，制御期の移行に伴う指さし行動の質的な変化についてである。無制御期から他者制御期に移行すると，本児に出現した指さし行動は，他者の指さしを同型的になぞる指さし行動から，他者と自己の相補的な随伴関係をなぞる指さし行動へと質的に変化した。同型的ななぞりの指さし行動は，本児が母親の指さしを理解する手段として模倣した結果，出現したものであった。一方，随伴関係をなぞる指さし行動は，本児が日常生活動作を獲得するために，保育士の指示動作である指さし行動と，自己の応答動作であるそれとを，一人二役的に再現した結果出現したものであった。

二つは，本児における指さし行動の出現の様相についてである。一般に，乳児は生後4ヵ月頃になると，自らにとって興味ある対象を見つめ，その対象を背景から前景に浮き立たせることができるようになる(Werner & Kaplan, 1963)。その後，生後9ヵ月頃になると，見つめることで対象を浮き立たせていた乳児は，次に同様の機能を自らの指でさすことに置き換えるようになる（山田・中西，1983；秦野，1983)。これが初出の指さしであると言われている。このような健常児における初出の指さし行動とは対照的に，本児の指さし行動はその前駆的な様相を全く示すことなく突然に出現した。しかも，本児の指さし行動は対象指示機

能を伴わず他者の指さし行動の形態と視点を同型的になぞることで初出した。そして同型的ななぞりからはじまった本児の指さし行動は，他者制御期に入り，他者と自己の相補的な随伴関係をなぞるものへと変貌した。このように「なぞり」の対象が他者の同型的な指さしから他者と自己の相補的な随伴関係の指さしへと変化したとはいえ，なぞるという指さしの機能は一貫して保持されている点で，本児の指さし行動の初出の様相は極めて特異といわざるを得ない。

三つは，それらの指さし行動が生活に及ぼす影響についてである。他者制御期に入り，他者の指示とそれに対する応答の相補的な随伴関係に基づく指さし行動を獲得した本児は，必要に応じてそれらをなぞることで，保育所生活に必要な日常生活動作を獲得することができるようになった。このように「なぞり」の指さし行動は，本児の保育所生活における適応性を高める役割を果たしたと言えよう。しかしながら，その反面で集団場面におけるさまざまな経験に伴って取り込まれ，内的に蓄積された多くの相補的な随伴関係が，外的な刺激によって脱文脈的に賦活されることがたびたび起きるようになった。そのことは結果的に本児の社会的相互作用を阻み，保育所生活の適応性を低める要因として作用した。この時期に出現した指さし行動は，本児の保育所生活にとって相反する二つの側面を持っていると言えよう。

3）自己制御期（3：10～5：10）の特徴

自己制御期に入ると，本児は制御の主体を他者から自己に引き戻し，自己の意図に基づいて行動を制御することができるようになった。この時期になると本児の日常生活動作は完全に自立し，それまで本児が示していた他者と自己の相補的な随伴関係をなぞるような指さし行動は完全に消失した。代わって，それまでみられなかった自己の要求を伝達する指さし（「要求の指さし」）や他者と注意を共有する指さし（「叙述の指さし」）など，指さし本来の機能を伴った指さし行動が散見されるようになった。

この時期に要求と叙述の指さしが出現したことについて，二つの意味が指摘できる。一つは制御主体についてである。他者制御期における指さし行動は他者の指示と自己の応答との随伴関係をそのままなぞることであった。すなわち，この時期においては自己と他者が未分化な状態にあり，自らの行為を自らが制御する行為主体としての自己が成立していないため，第三者的に随伴関係をなぞる機能としての指さし行動が中心であった。ところが，自己制御期になると自他の分化が成立し，自己と他者の相補的な関係性を基盤として自己の意図や要求を他者に伝達する，いわば他者志向性の明確な指さし行動が出現してきた。こうした他者の主体性に働きかける機能を持つ要求や叙述の指さしの出現は，本児が他者を意図や感情などの内的世界を持つ行為主体として理解しはじめていることを物語っている。

二つは，本児の指さし行動の発達過程についてである。先にも指摘したように，健常乳児における指さしは興味ある対象を背景から前景に浮き立たせるために指をさす，いわゆる静観対象としての対象の指示機能を伴って初出すると言われている（例えば，山田・中西，1983）。その後の発達に伴って，伝達的な機能および他者の関心や注意を喚起し，方向づけるような機能が重層的に累積していくことも指摘されている（たとえば，久保田，1982；山田・中西，1983；秦野，*1983*）。このような指さしの発達過程と異なって，本児の指さし行動は他者の動作の同型的な「なぞり」によって初出し，他者の指示とそれに対する応答との随伴関係の「なぞり」へと発達的な変化を示した後，自己制御期になってようやく要求や叙述の指さしが他者との社会的相互作用場面で見られるようになった。したがって，本児の指さし行動の発達過程は健常乳児のそれとは大きく異なっていると言えよう。

自己制御期になって，上述した要求や叙述の指さし行動が見られるようになったものの，その出現頻度はきわめて低く，しかもそれらが出現する場面は，担当保育士との交流場面だけに限定されていた。

対照的に，この時期に頻繁に観察された指さし行動は，他者が関与しない場面で出現する指さし行動，いわば非社会的な指さし行動と命名されるようなものであった。この非社会的な指さし行動に相当する指さしは，この時期に限って観察され

たわけではなく，他者制御期においてもその出現が確認されている。例えば，次のエピソードがそれである。

ロッカーの上にダンボールが置いてある。Aはダンボールに書かれた数字を指さして，「3, 4」と声に出して読む。その後，ダンボールから離れるが，再び前に立ち，数字を指さして，「3」と読む（エピソード4，3：06，VTR記録）。

母親の手記によれば，本児は2歳4ヵ月の頃から数字に強い関心を抱くようになっていた。上述のエピソード4に示された数字をなぞる指さし行動は，他者制御期に限らず自己制御期においても一貫して出現しており，本児のこだわり行動のひとつになっていた。

自己制御期になると，上述したこだわり行動としての指さし行動に加えて，この時期に特有な非社会的指さし行動が出現しはじめた。次のエピソード5は，そのひとつである。

学芸会の舞台上において，ダンスの発表中である。Aは舞台に立ち，他児が踊っている姿を横から見ている。しばらくすると，踊っている他児の前を横切って，舞台袖にいる保育士に近づく。保育士は元の場所に戻るように指さして指示する。Aは保育士に指示された場所を自らも同様に指さす（Fig. 3-1）。次いで，もう一方の手で保育士の側から指示された場所に向けて弧を描くように（Fig. 3-2）指さす（Fig. 3-3）。その後，Aは指示された場所まで戻っていく（エピソード5，4：10，VTR記録）。

本児が学芸会という非日常的な場面で，しかも不得手な踊りを要求される事態において，不安や不快を払拭するために，安全基地としての担当保育士を求めて接近行動を起こしたことはよく理解できる。しかし，保育士から返ってきた指示は元の立ち位置に戻ることであった。本児は保育士による指示の意味を理解するために，保育士の指さしをなぞり，そして，その指示を達成するための行動のプロセス，換言すればプランを指さし行動の軌跡で表したものと推測できる。このように考えれば，本児の両手を使った指さし行動は，当該の事態で自らの身の処し方を見極めるための問題解決的な機能を果たしていたと言えるかもしれない。

エピソード5に示された指さし行動は，本児が遭遇した困難な事態において，状況を把握して問題を解決するためや，自己の情緒的安定を図るための手段として機能したものと想定される。その意味でこうした指さし行動は他者への伝達的な機能を持つものではなく，むしろ自己の行動を制御することが主たる機能である，非社会的な動作であると言えよう。

一方，上述したエピソード5とは異なる様相を示す次のような指さし行動が出現した。

保育室での設定課題は，お面の色塗りである。Aは前に座る女児のお面を見つめる。突然，前方を指さしながら，「なんかいろいろまぜてた，色」と話す。前の女児は反応を示さない。続いて，Aは，「色は，ここだな，この色は」と言い，自分のお面を指さす。Aから離れた席に座る女児が「ハハハ，肌色だよ」と話すと，Aは「肌色？B

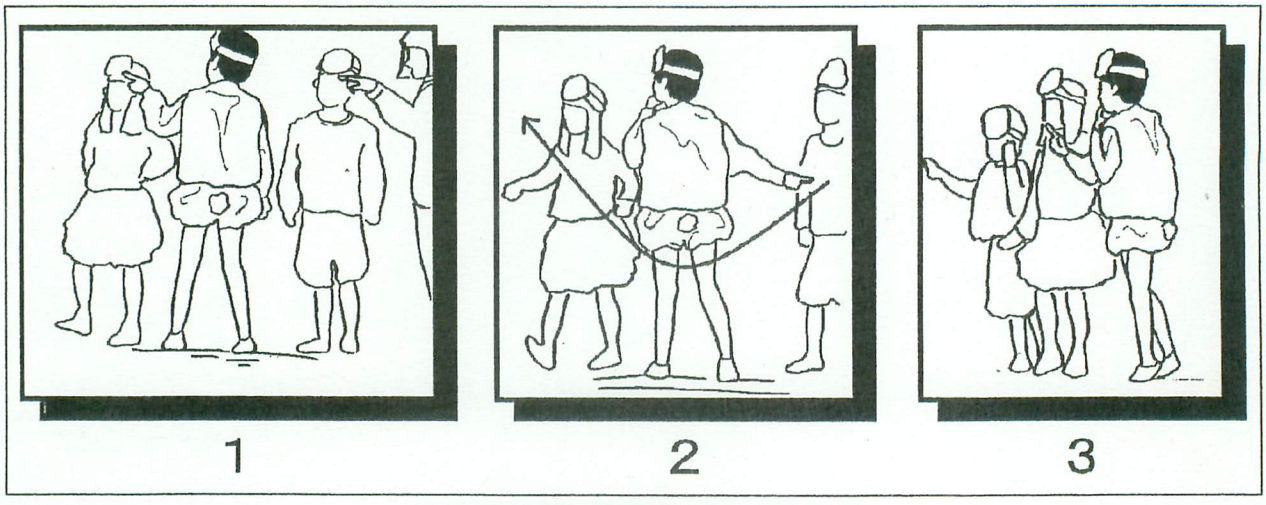

Fig. 3　適応的問題解決の指さし動作

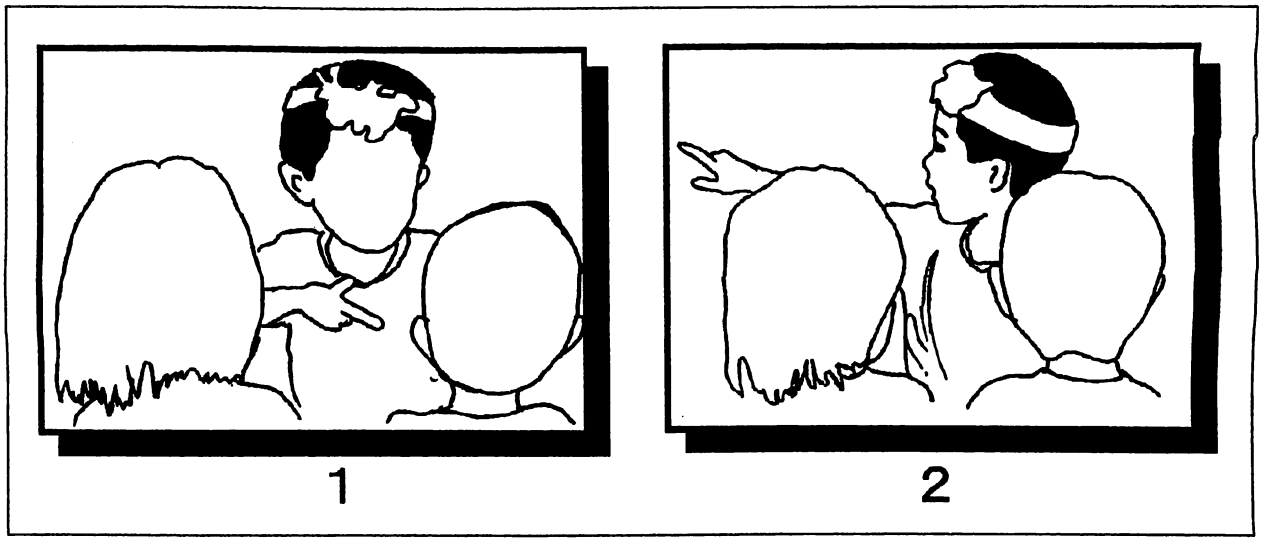

Fig. 4　内的活動の顕現化としての指さし動作

にわたしてよ」と言いながら，当該の女児の座る席とは反対の方向を指さす（Fig. 4-1)。そして，「C がもってけよ」と言いながら逆方向を指さす (Fig. 4-2)。周囲の子どもたちからの応答はないが，A は「D がわたせよ，D が」と一人で話し続け，一人でうなずく（エピソード6, 4:09, VTR記録)。

保育士はこの日の色塗り課題について，活動を始める前や活動中に色塗りに関する手順などを子どもたちに指示することなく，自由に活動をさせていた。そのため，子どもたちは互いに話をしながら自由に色を塗っていた。対照的に，本児は特定の相手に向かうともなく独り言を呟きながら，たびたび指さしをしたり，頷いたりしていた。

本児の活発な発話と指さし行動に対して，他児の反応は全く見られなかったことから，本児の行動は伝達機能を持たない内的活動の現れであることは明らかである。この色塗り課題は先のエピソード５のように非日常的でしかも衆目に曝され緊張を強いられる場面と違って，自由遊び場面ほどではないにしろ，ある程度の自由度が許容される半統制的な課題場面であった。したがって，予め定められた活動の準拠枠が緩いために，自由な活動ができる反面，作業は自己の判断に大きく依存することになる。こうした事態は，本児にとってはある種の緊張とストレスをもたらす場面となる。実は，従来から本児は特定の色に対してこだわりを示すために，これまで色塗りの場面で保育士からたびたび注意を受けており，それゆえにクレヨンの色選択は本児にとって緊張を強いる事態となっていた。こうした心的な抑圧事態は，ある種の現実逃避行動としての表象に基づく内的活動の活性化，いわゆるファンタジーへの傾倒現象をもたしたのではないだろうか。そのように考えれば，エピソード７で見られた指さし行動は，肥大化した内的活動の一端が指さしとして現実の場面に現出した結果であるとみることができるであろう。また，上述の特徴を持つ指さし行動は，状況を把握して問題を解決するためや情緒的安定を図るための指さし行動のような，適応的な行動制御機能を持つ指さし行動（たとえば，エピソード５）と異なり，社会的な場面において適応を阻む働き持ち，しかもその出現頻度は前者に比べて圧倒的に優っていた。それゆえ，肥大化した内的世界の表現型としての指さし行動は，自己制御期の中核的な特徴を表していると言えよう。

Ⅳ　結　論

本児の指さし行動は，行動の制御機能に基づく時期区分ごとに明瞭な発達的変化を示した。本研究で明らかになった本児の指さし行動の特徴をそれぞれの時期ごとに以下に記述する。

1．無制御期の終わり頃になって指さし行動の初出が見られた。しかし，その指さし行動は母親の動作を同型的になぞり，しかも身体軸までも

なぞることで指示対象を探索しようとする，いわば「なぞり」としての指さし行動にその特徴があった。

2．他者制御期になると，他者の指示とそれに対応する自己の動作との随伴関係をなぞる指さし行動が出現した。それは，「なぞり」という点では，上述した無制御期の指さし行動と同じであった。しかし，無制御期の指さし行動が他者の動作の同型的な「なぞり」であったのに対して，この時期の指さし行動は他者の指示とそれに対応する自己の動作との相補的な随伴関係の「なぞり」であった。

3．自己制御期になると自他分化が成立し，自己と他者の相補的な関係性を基盤として自己の意図や要求を他者に伝達する，いわば他者志向性の明確な指さしが出現してきた。しかしながら，こうした指さしの出現頻度はきわめて低く，むしろこの時期を特徴づけたのは，肥大化した内的活動の一端が指さしとして現実場面で顕現化した非社会的な指さし行動であった。

4．無制御期や他者制御期にみられる指さし行動は，他者の指さしの理解や日常生活動作の獲得といった適応の手段として出現したのに対して，自己制御期の指さし行動は内的世界の現実世界への拡張として起こり，結果的に適応を阻む要因の一つとなっていた。

5．本児の指さし行動の発達変化は，高機能自閉症児における指さし行動の発達的特徴の一端を表しているかもしれない。

V　引用文献

Baron-Cohen, S. (1989). Perceptual role-taking and protodeclarative pointing in autism. British Journal of Developmental Psychology, 7, 113-127.

Burgoine, E., & Wing, L. (1983). Identical triplets with Asperger's syndrome. British Journal of Psychiatry, 261-265.

Camaioni, L., Perucchini, P., Muratori F., & Milone, A. (1997). Brief report：A longitudinal examination of the communicative gestures deficit in young children with autism. Journal of Autism and Developmental Disorders, 27 (6) , 715-725.

Cox, A. D. (1991). Is Asperger's syndrome a useful diagnosis? Archives of Disease in Childhood, 66, 259-262.

Curcio, F. (1978). Sensorimotor functioning and communication in mute autistic children. Journal of Autism and Childhood Schizophrenia, 2, 264-287.

Damasio,A. R., & Maurer, R. G. (1978). A neurological model for childhood autism. Archives of Neurology, 35, 777-786.

DeMyer, M. K., Alpen, C.D., Barton, S., DeMyer, W. E., Churchill, D. W., Hingtgen, J. N., Bryson, C. Q., Pontius, W., & Kimberlin, C. (1972). Imitation in autistic, early schizophrenic, and non-psychotic children. Journal of Autism and Childhood Schizopherenia, 2, 264-287.

Frith, U. (1989). Autism：Explaining the enigma. Oxford:Blackwell.

Goodhart, F., & Baron-Cohen, S. (1993). How many ways can the point be made? Evidence from children with and without autism. First Language, 13, 225-233.

秦野悦子 (1983). 指差し行動の発達的意義。教育心理学研究, 31, 3, 255-264.

浜田寿美男 (1992).「私」というものの成り立ち. ミネルヴァ書房.

神園幸郎 (1998). 自閉症児における姿勢・運動の特性：「ぎこちなさ」の心的背景について. 小児の精神と神経, 第38巻, 第1号, 51-64.

久保田正人 (1982). 言語・認識の共有. 講座現代の心理学, 認識の形成, 第5章, 小学館, 177-256.

Loveland, K., & Landry, S. (1986). Joint attention and language in autism and developmental language delay. Journal of Autism and Developmental Disorders, 16, 335-349.

Manjiviona, J., & Prior, M. (1995) . Comparison of Asperger syndrome and high-functioning autistic children on a test of motor impairment. Journal of Autism and

Developmental Disorders, 17 (3) , 23-39.
松島はるか・神園幸郎 (2004). 高機能自閉症児の「不自然な動作」の認知・社会的背景. 琉球大学教育学部附属障害児教育実践センター紀要第6号.
Mundy, P., Sigman, M., Ungerer, J., & Sherman, T. (1986). Defining the social deficits of autism : The contribution of non-verbal communication measures. Journal of Child Psychology and Psychiatry, 27, 657-669.
Mundy, P., Sigman, M., & Kasari, C. (1994). Joint attention, developmental level, and symptom presentation in autism. Development and psychopathology, 6, 389-401.
Sigman, M., Mundy, P., Ungerer, J., & Sherman, T. (1986). Social interactions of autistic, mentally retarded and normal children with their caregivers. Journal of Child Psychology and Psychiatry, 27, 647-656.
Welner, H., & Kaplan, B. (1963). Symbol formation. New York : Wiley.
Wetherby, A. M., & Prutting, C. A. (1984). Profiles of communicative and cognitive-social abilities in autistic children. Journal of Speech and Hearing Research, 27, 364-377.
Wing, L. (1981). Asperger's syndrome; A clinical account. Psychological Medicine, 11, 115-129.
山田洋子・中西由里 (1983). 乳児の指差しの発達. 児童青年精神医学とその近接領域, 24, 239-259.

謝 辞

本研究の実施にあたり，ご協力いただいた対象児のA君とご両親に厚く御礼を申し上げます。A君の健やかな成長を祈りつつ，ここに記して感謝の意を表します。

付 記

本研究は文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C）課題番号 15530431）の助成を得た。